［解釈］

T・S・エリオットの学位請求論文『F・H・ブラドリの哲学における認識と経験』について（3）

今　村　温　之

既に（1）（2）（5）（6）（7）と扱ったので，（3）（4）が残された。今回は（3）を扱う．

第三章　心理学者の認識の取り扱い

1　観念的と実在的とは究極的には同一であり，それら二者への区分は如何なるものであっても現象に過ぎない・観念的は主観的実在的であり，実在的は対象的観念的である・しかし，この区分が実在を維持してきた・経験は究極的には非関係的であるが非関係的な経験は不可能である・心理学的な観念と実在との区分とは，以上の如き区分に一致しないのではなかろうか

経験であり実在である全体の中には実在的と観念的の区分（実在と非実在の区分も含まれる）があるのだが，この区分は実在的なものではなく現象であることが解る．何故なら実在的は大いに観念的であり，観念的はまた実在的であるからである．しかしこの区分がある意味合いで実在を維持しているのである．何故なら，経験とは究極的には非関係的であるにも拘らず，非関係的な経験は不可能であるからであり，実在的と観念的との区分と関係が実在という言葉に何らかの意味を内包せしめるからである．実在は，その存在に関しては思考(関係的な視点)

に依存している．何故なら究極においては，世界は完全に実在的であるか又は観念的であるかいずれかだからである．そして観念性と実在性とは結局同じものなのである．そして，観念的は実在的と完全には区分できないのであり，前進してそれが意味する実在へと流れ込むか，後戻りしてそれが作り出されると言い得る実在へと流れ込む傾向性があったのである．何故なら，これら二つの実在は，結局は発展段階の異なる同じ観念だからである．さてこのように実在と観念とが截然と切断されていない，両者が絡み合った流動的な状態を認める理論にあっては，誤謬の問題は紛糾するのが常である．エリオットは心理学的な実在と観念の区分は間違っているのではなかろうかと考えるのである．即ち，対象と活動の区分や対象と表象の区分は，われわれの一般原則たる実在と観念の区分に対応しないのではなかろうかと考えるのである．従って心理学における主観－質料の問題が再検討されねばならないと考えるのである．

Pp. 57-8.

2　観念と実在とを分離する心理学的諸型・それらの問題点：実在の把握には観念と実在とを最初から分離せねばならないのか？こうした分離を認めるにせよ，心理学という個別科学の対象の種類をその区分は与えることが可能か？

心理学における実在と観念の区別には次のような型がある．①一方に外的実在があり他方に精神内容があるのだが，精神内容は外的実在を志向する限りにおいて観念的であり且つ独自の実在性を帯びるのであり，その独自の実在性の局面の下でその心理内容が心理学者によって研究されるとするもの．②内容と外的実在は区別出来ないとし，対象と活動ないしは意欲とを区別するもの．③意識の活動は全く否定し，存在するものを別々の複合体に組み立てるもの．④実在は感覚的諸要素から成り，残余は総て観念の構成物とするもの．⑤総てがある意味では心理的で，それゆえ対象と活動の区分は内的実在と外的実在との区別に等しくなく，

そうした区分は自らの精神を知るという問題に還元しうるというブラドリのもの．

以上のような区分には次のような幾つかの問題がある．実在の把握という行為は厳密に精神的部分と外的部分とに別れるのであろうか．たといこうした区別ができるにしても，心理学という個別科学を形成しうるような対象のクラスをその区分は正確に与えてくれることが出来るのであろうか．また認識の可能性の問題，延いては知識の形態と構造の問題といったものが存在するのであろうか．

P．58．

3　観念，表示，意味は対象的実在と異なる・認識は認識される実在と同じように取り扱えない

心理学には「精神内容 mental　content」と「心理的過程（活動）psychical process」という二つの術語があるが，これらは検証を経ていない想定物であり，特に後者は実在論からの批判を浴びたのであった．前者は今でも多くの心理学者によって想定されている．表象はそれの外部対象と一致するとも言えようし，言えもしないが，完全な一致ないし同一性があるとする場合には，外部対象の表象は二つの円の円周の接点に位置付けられるのである．即ち，一つの点が，二つに分岐するコンテクストへと別々に二回ほど引き寄せられるのである．ウォウドゥハウス女史曰く*．内容にはあるコンテクストがあり，対象には別のコンテクストがある．前者は精神的歴史に連続し，後者は外部ないしは自然の歴史に連続するのである．ヴィタゼクはさらに極端に次のように述べる**．「石の賽子は固く，冷たく，灰色で，重く，角がある．しかしそれの表象には，賽子の観念ないし記憶には，そうした特徴は全くないしそうした特徴はあり得ない．――表象はそれ自体孤立して再び固く冷たいといった表象を内包するのである．……木の私の内部像は私自身にしか知られていないのである」．ヘフラー***にとっては，自然の現象は空間的なものとして表象されるが，全ての精神的現象は非一空間的なものなのである．スタウト****とっては，自分の三角形の知覚は三角形ではないのであ

り，知覚は線と角で出来ていないのである．ティチナー*****にとっては，心理学者は精神的経験をその最も単純な構成要素へと分析しようとするのである．

実在把握の本来の姿である表示 references や意味 meanings が，それらが表示する対象と同じように扱い得るという以上の諸学者の想定は，弁護する必要ない想定であり，正当なる根拠が殆どない想定なのである．エリオットはこの想定を拒否する理由として，註******の中でプリチャードを引用しつつ次のように説明している．

「このような想定は，自意識や反省を世界についての意識の場合と同じように取り扱えると考える点に特徴を持っている．即ち，反省に先立って理解していた世界に対するのと同じように理解された実在として，反省された〝世界に対する意識〟を考えるという点に，特徴を持っている．即ち反省された〝世界に対する意識〟は，反省以前の世界同様，単にあるものとして，つまり何物かについての認識ならぬものとして，扱われるのである．要するに実在に対する認識ではなく，認識される実在となってしまっているのである．このようにして心的実在が考え出されるのである．しかしこうした考えには矛盾がある．反省された認識が，単にあるだけの精神的実在であるとするならば，この認識にあっては世界は直接には精神の対象ではなくなるのである．なぜなら単にあるだけで，何かに関する認識ではないような実在は，対象を全く持ち得ないからである．……この間違いの根底は，経験主義的心理学によって，認識を徹頭徹尾取り扱う態度の中に潜む前提の中にある．――つまり，認識ではない実在は把握される実在であるといった風に，認識が把握される実在として取り扱われうるという前提なのである．」

要するに，エリオットの場合，観念の認識は対象的実在の認識と同じではないのである．*******

*

Helen Wodehouse, *The Presentation of Reality*, P. 13, 1910.

**

Stephan Witasek, Grundinien der Psychologie, S.3, 1908.

***

Alois Hofler.

****

G. H. Stout

*****

Edward Bradford Titchener.

******

H. A. Prichard, *Kant's Theory of Knowledge*, pp. 125-6, 1909.

****

Pp. 58-9.

4　表示や意味を対象と同じように取り扱いうると想定する理論の実例

4－1　「事実」についての暫定的定義・事実とは注意の一点であり，一つの局面のみの主張であり，観念による構成物である・事実とは一つの特殊な視点から観られた注意点以外の諸局面の除外において成立する・事実はその背後に観念の連関を持っているから確かなのである・**科学には先験的観念的局面があり，事実はその局面から取捨選択されたものである**・しかし**科学的事実の個物性は表示や意味ではない**・心理学的表象は主観を経験するという視点から観れば対象と同一である

事実とは注意の一点であり，その一点は正に一つの局面を持つか，あるいは一つの局面の下で扱いうるものである．従って事実とは，観念的構成体であり，実践的，科学的関心の多少とも変動する領域の内部に存在するものである．

事実は中立的判断ではなく，「これこれということは事実である」と言ったよう

に，主張される「一つの対象的 an objective 対象の一局面」のことである．事実は内在的判断とその判断の妥当性に対する外からの認識行為とを含んでいる．「ヴェラスケスがこのフィリップ二世の肖像画を描いた」には主張が不足しているのであり，「ヴェラスケスが～したのは事実である」とか「は本当である」とか「をよく知っている」と言うときに事実が主張されているのである．

疑問の余地のないとされる**歴史的実在の領域，即ち表示された判断が正誤いずれかであらねばならないと言ったような在り方の領域は，**「間違いない事実」の領域であるとされる．

もしそのような正誤の判断が内在的証拠という根拠に基づいてなされるのであるならば，更に又疑問の余地のないとされる美学的（感性認識的）価値の領域と言うものもあろう．つまり事実とは中立の事実ではないのであって一つの局面のみを主張しているのである．事実とは一つの特殊な視点から観られた一つの注意点以外の諸局面の除外において成立する．事実はその背後に観念の体系を持っているからこそ，疑いの余地がないのである．

「事実は世界の中で発見され，煉瓦のように組み合わされるようなものではないのであって，総ての事実はそれらが出来上がる以前にそれらのために準備されたそれらの場をある意味では持っているのである．そして事実の内属する一つの体系と言ったものが間接的に意味されなければ，その事実は全く事実ではないのである．**事実にとって本質的な観念性とは一つの特殊な視点を意味し，同一の注意点以外の諸局面を除外することを意味するのである．**自然，社会を問わず如何なる科学も先験的であるような意味合いがあるのである．即ち科学は特殊な視点，その科学へと表示される事実の如何なるものよりもずっと根源的とも言える視点，の要求を満足させると言う点で，如何なる科学も先験的なのである．このような理由から，科学の発展は機械的ではなくて有機的であると言えよう．というのは，人間の個人的人格が最高度に達したときの本能的選択と除外を伴った，様々な事実の相互適応というものが科学の発展にはあるからである．なる程こうした理由から，一つの科学の性格は，一人の人間の性格

のように，その着想（妊娠）の瞬間において既に現在しており，且つその一方であらゆる局面で，ある新たな予見されないものへと展開して行くとも言えよう．だがしかし，一つの科学はなんら洗練されていないその着想点から，その科学が終始一貫して保持するであろうある種の性格（この性格はわれわれのあらゆる言葉による定義付けを虚偽のものとするであろうが）を持つであろう．従って厳密な叙述を求めないならば，われわれが初期の特質の中に心理学の充全な特質を探し出そうとすることは当然のことである．そのようにして私がこれまでに解ったことは，先ず第一に如何なる科学的個物性も「表示とか意味」ではありえないということであり，また「表象」という呪文でもって「表示ないしは意味」を呪現出来るものではないということである．後からも論じるが，**表象とは，主観を経験するという視点から観れば，対象と同一なのである．**そしてこの視点から観る限り，「あなた」は形而上学においては何ら上訴権を持たないのである．しかしながら，もしわれわれがもっと実在的なものを探しだそうとすると(健全なる良識がそうせよとわれわれに命ずるのだが)，われわれの基準は経験を自分勝手に分割することや個物性を自分勝手に無視することではなく，実在の度合の理論ということになる．しかも正にこのような自分勝手な区別こそが，内在的対象とか超越的対象や非実在的対象とか想像的対象とかの難問をわれわれに与えているのである．」

ある科学の所与としての事実はその背後に先験的な観念の連関を所有している．そして，事実の観念性はその体系に基づく同一の注意点以外の諸局面の除外にある．しかし科学的事実の個物性は表示や意味とは異なる．心理学における表象とは経験する主観の視点からは対象と同一なのである．そして対象とは形而上学的な表示や意味とは異なるものなのである．

Pp. 60-1.

4－2　スタウトの場合

4－2－1　対象を表示する表象は意識内容ではない・意識内容とは知られている物の世界であり，対象を表示する表象は知られている物ではなく，知られている表象は対象を表示しない・表象（感覚）も対象も同一の対象である・**対象は多様に決定されているが，表象は一つのあり方で決定されている**・対象も表象も連続しており，赤い感覚とは赤い「それ」についての感覚である

スタウトはわれわれの本性の認識面に属する諸「表象」というものがあると考える．彼によれば，それら表象とは，あらゆる瞬間において知覚されたり，思考されたりする「対象」の本質を直接に決定するものであり，あらゆる瞬間におけるわれわれの経験総体を構成する諸要素なのである*．エリオットはこの「あらゆる瞬間におけるわれわれの経験総体」とはその意味合いが広すぎ，何らかの限定を施す必要があるが，それが与えられていないので，表象は生理学的過程や論理学的カテゴリー（両者ともに知られているものであり，対象である）をも含むものとなってしまうと述べる．そしてこの表象とは「意識内容」のことを意味しているのであろうかと尋ね，この問に対し，**対象を表示する表象は意識内容ではないと述べる．何故なら，いわゆる意識の内容は，知識の世界に過ぎず，存在と知られることとが同一であるような存在者の集合に過ぎないのである．ところが，表象が自らの対象を表示する限りでは，表象そのものは知られているものではないからであり，表象が知識の対象とされる限りでは，表象は最早対象を表示していないからである．**認識の際の赤色感覚は，表象ではなく，決して心的ではない対象たる赤い対象を意識することである．**赤色の対象から感覚としての赤色にわれわれの注意を向けるということは，多様に決定された対象からたった一つのあり方で決定された対象へと注意の向きを変えたということを意味している．両者ともに対象なのである．**スタウトにとっては，いわゆる実在の対象とは，目やその他の諸感覚に与えられる一連の表象によって，その周辺が与えられたり支配されたりするのである．ところが，エリオットにとっては，対象とはその一連の表

象に他ならないか，乃至は，一つの感覚であっても，対象の周辺が与えられたり，対象が支配されたりするのである．エリオットにとっては，一つの感覚が対象を与えることがないのに，二つ以上の感覚ならば対象が与えられるということは理解できないのである．ところが，スタウトにとっては「対象は正に表象されるのであり，対象と表象は別種の物なのであり，対象は意識の中に表象されるのではなく，意識へ表象されるのである」．ということは意識の外に対象，中に表象という形で，意識の内外に二つの知覚を彼は考えているのかもしれないとエリオットは述べる．そしてこのように二つのものを別種のものと考えるということが，どのようにして可能なのかが解らないと述べる．エリオットにとっては，二者は同一のものであり，それらの違いは次のようなものに過ぎない．「赤い対象」とは赤という特質とは違う方法で認識される対象のことであり，それはまた一つの秩序の中で決定された場を与えられた一つの対象のことである．一方で，その感覚は未だこのようには位置付けられていない一つの対象のことである．「赤さ」とは概念であるから，「赤さ」の感覚を持つというのは正しくない．赤の感覚というのも正しくない．**その感覚とは赤い何物かについての，即ち，赤い斑点ないし赤い区域についての感覚だからである．**その感覚の原因は病理学的な刺激であるという発見も，その感覚の対象性に影響を与えることは全くない．**赤い「それ that」がそこにあったのであり，**その対象がそれ以上定義づけられたり，その真実性をそれ以上実証できないということは，対象の対象性を減じることには決してならないのである．

Pp. 61-2.

4—2—2　対象と観念は別々の現実存在同士ではない・観念とは表示である・表示は現実存在ではない・孤立した事実（現実存在）は観念ではない・但し，観念の全体は実在と観念と観念の表示とからなる

スタウトはまた別の仕方で対象と表象の区分を行なっている．彼は，三角形の

知覚は三角形ではないと言って，対象と表象とを区別している．又ヴィタゼクによれば，石の観念は固くもなければ灰色でもないのである．これと同種の見解として，観念と対象とは別種のものだから，観念は対象の自然な特性を持ち得ないという見解や，観念がそうしたものを持ち得ないことが，対象とは異なる観念が存在することを示しているという見解がある．しかし**これらの見解は，表示を現実存在と取ってしまっている**のである．**つまり，観念は，その対象とは異なった現実存在を所有していると考えられている**のである．**この現実存在とは表示を事実として孤立させた（抽象した）ものなのである．**この事実（一つの対象的である）は，三角形であるとか灰色であるとかいうふうには言えないが（尤も固定したものではあろうが），このように事実として孤立させられた物は実は観念ではないのである．観念が表示を行なうという事実は，一つの孤立した事実としての観念では決してないのであって，唯一の疑問の余地のない事実なのである．しかしそれでも猶そうした観念は観念自体からの抽象である．何故なら観念の全体とは実在と観念と観念の表示という事実の三者からなるからである（それにもかかわらず観念全体は一者であってそれら三者ではあり得ないのであるが）．*

*

P．63．

4－2－3　表象はその対象とは別種の対象ではなく，表象は対象に連続しており，両者は一体である・表象は実在の本質に関する先入観の体系から孤立した対象ではなく，その体系に位置付けられる・誤謬にあっては，一つの知覚と二つの対象があるのではなく，二つの知覚（二つの対象）がある

三角形の知覚は三角形ではないということは，その表示は三角形ではないという馬鹿げたことを意味しているに過ぎない．ある意味合いでは，観念（や知覚）はそれが意図する実在と同じものなのである．従って，**多くの知覚によって対象**

が決定される以前には，一つの知覚を，未だ確定されていない対象と取ってしまったり，誤謬の対象と取ってしまうことがあり得るのである．同じ知覚が一つの対象から別の対象へと移行して行くように思えるときには，その知覚は現実存在し，意図された対象から孤立した対象であると言いたくなるのである．遠くを飛んでいる鳥だと思っていたら，近くを飛んでいる虫だったなどということはよくある話である．こうした場合，二つの対象に連続した一つの知覚があると，われわれは言いがちなのである．しかし，これは間違いなのであり，実は二つの知覚があるのであり，二番目のほうが一つの「世界」とより無矛盾であるだけなのである．けれども，何れの知覚も意識へと表象される対象へとは連続していないのである．

知覚される対象が「そこ there」に現実に存在しないならば，対象の一つの知覚は存在し得ないのである．さらに「あなた」がこの「表象」を，実在の本質に関する如何なる先入観からも孤立した（中性の）物として考えるならば，「あなた」は次のような矛盾を犯すのである．「あなた」は，その知覚を幻覚ないし真の何れかとして取り扱わねばならない．ところが，真の視点ないし偽の視点から分離した，孤立した知覚といったような物は現実存在していないのである．知覚は対象であるにもかかわらず，対象から知覚を孤立させることは，二つの別種の対象をこしらえることになるのである．知覚とは，スタウトが考えているような，その対象とは別種の心理学的対象ではあり得ないのであって，対象に連続したものなのである．スタウトの考えには，融和しがたい二つの視点が含まれているのである．*

*

Pp. 63-4.

4—2—4　バークリ風の考え方に対する批判・個的精神 individual mind へと知られている限りの物（知覚された観念）は孤立して存在する（表示が抽出された後の残り物である）・その実在性は表示としての観念の実在性

ではなく個的精神に関係した物（対象）としての実在性である・表示抜きの意識内容を幾つ足し合わせても表示の先の対象は生じない

バークリ（George Berkeley 1685-1753）にとっては，存在するものは知覚する実体としての精神と知覚された観念の二つであると言われ，このことは「Esse est percipi 存在とは知覚されることである」の命題をもって表わされている．スタウトもこの命題に添って,「諸物が如何なる瞬間においても知られている限りにおいてのみ，即ち，諸物が……個人の精神へと知られるようになる限りにおいて，従って，諸物が知っているその精神および諸物相互と更に発展した諸関係を取り結ぶ限りにおいて，心理学は諸物を考察するという意味合いにおいて，心理学の取り扱う諸事実の存在は知覚されている*」と述べる．

しかし，以上の如き枠組みでは，如何なる事実の存在も知覚され得ないのである．心理学は「如何なる瞬間においても個人の精神へと知られている限りにおいてのみ，諸物を」現実に考慮するのであろうか．諸物が個人の精神へと知られている限りにおいては，諸物は孤立して存在しているのである．**もし心理学者が別人という個人の精神（他者の自我）に知られている諸物の本質を調査しているのならば，諸物がこの精神にとって所有していた表示という実在を諸物から抜き出して捨ててしまい，その代わりに別種の実在である，この精神へと関係した諸物の実在なる物を調査しているのである．**

スタウトの挙げる，煙草を喫煙する人物の例は，彼の定義を徹底すれば，三つの煙草が存在することになる．

(1) 喫煙者（の自我）に知られている煙草．
(2) 心理学者（の自我）に知られている「喫煙者に知られている煙草」．
(3) （学者の役割を演じていない一私人としての）心理学者（の自我）に知られている煙草．

以上の区分がいわゆる主観性の強いものから客観性の強いものへと，いわゆる個

人性の強いものから社会性の強いものへと，並べられていることは理解できるが，もし我々が心理学者であることに満足するなら，これら三つの表象が同一であるという根拠は何処にもない．しかし，スタウトは三つの個人的自我の諸経験が異なっているということを主張しているだけではないのである．彼は，心理学は外的世界の構造を説明しうるという，即ち，心理学は先ず実在を表示抜きの個人的実在へと完全に抽象化し，この諸個人の抽象物をつなぎ合わせ，表示の先にある対象的実在をこしらえることができるという，矛盾した見解を主張するのである．**

原注．　．

*

Mind, April 1907. Prichard への返答において

**

Pp. 64-5.

4－2－5　スタウトの場合，例えば「感覚」という言葉が対象的実在にも観念的実在にも生理学的過程にも結びつく，つまり一つの言葉が幾つもの実在と結び合わされ，幾つもの物を無造作に意味する・この結果，実在を区分して出来上がる対象の幾つかのクラスが明確に生じない

感覚の本質に関するスタウトの所信は明確ではない．彼は感覚を「把握行為から区別された把握された何物かである．対象ないし表象である．」と言う．しかし，表象とは「直接的にせよ，間接的にせよ，知られている状態で知られているあらゆる物」であるとも言う．「知られている状態で知られている」とは，①知る人の視点から知られているのか，②知るという行為を行なっている知る人を見守る観察者の視点から知られているのか，何れを意味するのか不明なのである．次に，彼は「感覚が正確に主観的な状態を構成する段階に入るならば，感覚は純粋な対象ではあり得ない」と述べ，「表象が自然なものであるならば，表象の記憶は可能であろうか」と述べる．更に彼は「感覚は現実の刺激作用を伴う意識の特殊形式」

とも言う．そして再び彼は「感覚とは対象である．植物が根や茎や葉から出来ているように，（外的）対象は諸感覚から出来ている．」と述べるのである．これでは，何が感覚で，何が対象なのか解らなくなるのである．

上のような混乱は，幾つもの言葉に一致対応する幾つもの実在が存在しないということよりも，一つの言葉が重婚的に様々な実在と組み合わされて，幾つもの物を無造作に意味することから生まれるのである．そして，その結果，幾つもの実在を区分して出来上がる，対象の諸クラスが明確に現われ出ないということになるのである．

一つの言葉が無造作に幾つもの物を意味するという問題はスタウトに特有のものである．幾つもの実在に対応する，対象の諸クラスが明確に区分されていないという問題は主観－質料 subject-matter というものが一般的に持っている問題点である．

4－3　アリグザーンダの場合

4－3－1　アリグザーンダの精神的（意欲）と非－精神的（対象）との分離・これらは分離した対象同士ではない・しかし，アリグザーンダにとって，感覚とは非－精神的（対象）であり，それが表示するはずの対象と独立して並立する・しかし，注意の対象とこの対象を条件付ける特質とは同等に対象的ではあり得ない・アリグザーンダは感覚から対象を構成するときに矛盾に陥る

幾つもの実在に対応する対象の諸クラスが明確に区分されていないという問題はアリグザーンダ（S.　Alexander）において顕著に窺える．彼は，精神的領域を非－精神的なるものから区別しうると考えているが，その区分線は見当違いの所に引かれているとエリオットは考える．アリグザーンダは「精神は意欲 conation から成り立っている．何故なら情動 affection は意欲の一形式として扱われるからである」と述べる．彼にとっては，知覚力 sentience は精神的であるが，質におけ

る変動がないのである．その一方で，感覚与件 sen-sum ないし感覚 sensation は彼にとっては非－精神的である．更に，心に像を描くことは精神的，心に描かれた像は自然的である．そして，緑の対象に注意するときは，注意の対象は「緑という感覚そのものであろう」とも言っている．

スタウトの場合，精神的は意欲（動能）であるから，表象という一見したところ精神的現実存在に思えるものが無く，スタウトのところで論じたような問題が存在しないのである．(本来截然と切断されることの出来ない)感情と対象とが厳しく区分されている為に，彼にはスタウトのように感情と対象の間で（即ち，表象について)揺れているということがないのである．アリグザーンダにとっては，非実在の対象，即ち，現前するものを何も持っていない表象の問題は存在しないと言えよう．しかし，アリグザーンダへの反論は結局のところスタウトへの反論と同じことになるのである．例えば，感覚（非一精神的）の場合は，アリグザーンダは感覚の意識という意識を想定している．だがスタウトの場合に論じたように，色の感覚とは色のついた何物かについての感覚であり，われわれが色について考えるときには，それはわれわれが考えているその色以外によっては条件づけられない物の色のことなのである．同様に皮膚の苦痛の感覚とはわれわれが考えているその苦痛によってのみ条件づけられている対象の与える感覚なのである．従って感覚とは対象を意識している一つの方法であり，**感覚という意識に意識的になるにつれ，感覚の意識は自身ないし対象の何れかを更に限定して行くのである．**赤に対する意識とは一方において赤い意識であり他方において赤い対象を意識することなのである．もし感覚が対象と全く異なるものであるならば，アリグザーンダはスタウトと同じ問題を抱え込むであろう．即ち，感覚から対象を構築するときに，表示を抽出し終わった抽象物から表示の先である外的実在を構成せねばならなくなるのである．

なるほど感覚とは，それが表示する対象であるという意味合いにおいては，対象である．しかし，感覚はそれが表示する対象と独立して，即ちそうした対象と並立して，存在するような対象ではないのである．「注意の対象と，この対象の特質，即ち，その対象を条件付けている状況とは，これら二者がそれら自体として

存在していると観る視点から観るならば，同等に対象的ではあり得ない」のである．*

*

Pp. 66-7.

4－3－2　感覚は対象と一体で，二者は切り離せない・孤立した感覚のみでは対象がないので，注意の対象とは成り得ない・認識された感覚は自我と外的世界の枠組みの中で考えられた感覚だが，孤立した主観や孤立した対象の描写ではなく，特異な関係の感情である

感覚には，pleasing と pleased のように，言葉の上でだけであるが，能動-ing と受動-ed の局面がある．これらの局面は一つのものの両局面であって，区分はできるが切り離すことは出来ない．われわれは実践的領域にあっては，感覚の能動的局面を特に強調したり，対象的局面をとくに強調したりするが，そうした場合でさえ，一局面のみを他局面から分離しようとは意味していないのである．「感覚それ自体 sensation-in-itself」はブラドリの言葉では「感情 feeling」ないしは意識よりももっと原初的な経験なのである．しかし，孤立した感覚 sensation in itself はそれ自体では注意の対象 object of attention とはなり得ないのである．感覚と知覚は概念においては異なるが，存在 existence においては度合いにおいてのみ異なるのである．知られている感覚は低度の知覚でもあるのだ．われわれが「感覚を持った」と述べる瞬間には，われわれは認識論へと踏み込んでいるのであり，自我 self と外的世界 ex-tenal world とを措定してしまっているのである．しかし，その感覚は孤立した主観ないし孤立した対象の何れかを描写したものではないのであって，ある特異な関係の感情 a feeling of a peculiar relation であるという点において，それでもなお感覚なのである．*

*

P. 67.

4－3－3　感覚は対象へ，その対象は感覚へ，その感覚は対象へ……と超越する・精神と物とが同じ対象として存在するような対象的世界にあっては，真正なる対象は現前しない・感覚と対象とは双方共対象であるが，段階の異なる対象同士である・感覚（単一の対象）は（複合の）対象へと超越する

対象へと至る幾つかの段階における，その段階毎に孤立した感覚の状況を，それらから順々に発展して来た対象と比べれば，それらの感覚は発展した対象と同じレベルでは対象ではあり得ないということになる．何故なら，それらの感覚が表示するのはこの発展した対象なのであり，以前のようにそれら感覚自身を表示するのではないからである．それらの感覚はこの発展した対象を意識する方法，この対象の内容なのである．総ての段階を合わせた経験とは，一つ高いレベルで一つ離れた対象を一つ深く感じることを繰り返して行くことなのである．言い換えるならば，対象が表示へと段階的に超越して行くのであり，絶対的な対象的は何処にも見出だせないのである．

ところが，アリグザーンダの世界ほど対象的な世界においては，人は自分へと現前する真正なる対象を持つことが出来ないのである．彼は次のように述べる．「物を知覚することは，テーブルと床とが一緒に存在するように，精神と物とが一緒に存在することを意味するのである．従ってテーブルを想像することは，精神とテーブル（想像されたテーブルには不備な点と付加された要素があるが）とが一緒に存在することを意味するのである（'On Sensa-tion and Images.' *Proceedings of the Aristotelian Society* New Series X 15.）」．

しかしエリオットにとっては「対象が正に諸感覚の複合体であるということ――バークリの立場に繋がるものであり，唯名論にも繋がるものである――を認めぬ限り，如何にすれば精神と物が一諸に存在することが可能であるのか解らない」のである．

アリグザーンダにとっては，知覚された物は，感覚的諸要素以外にも正に観念的な形で精神へと現前する他の諸要素をも含むのである．しかし，彼にとっては，観念的諸要素そのものは対象的で非－精神的である．彼にとっては，観念的諸要素は知覚の過程そのものの途上において感覚的諸要素に対して自らの真の関係を提示するのである．

しかしエリオットは次のように述べる．

「ケーキが正しい材料と上手な調理から成るかのように，物が感覚的諸要素と諸観念から成ると言うべきではない．……それら二つの種類の要素に同時に同じ方法で注意できたりしたりすると言うのは正しくない．そうお望みなら，なる程，観念的諸要素は非－精神的かもしれないが，観念的諸要素と実在的諸要素との関係は相互表示と相互内包の関係なのである．……対象のみからなる世界の中には，内包の余地を私は見出だせない．様々な色の集積が[表示する(内包する)] 絵はそれらの色の諸感覚と同じく [対象的] なのであるが，同じあり方では対象的ではないのである．絵を認識することは実在の異なったレベルへの移行を意味するのである．様々な色の集積は，このように，それら自体を超越してしまったのであり，単一の対象であることを止めてしまったのである．*」**

*

P．68．

**

Pp．67-8．

4－3－4　対象的諸要素が抽象された，主観－質料たる意欲とは認識され得ぬものである

以上の事柄は，心理学の主観－質料に関するアリグザーンダの理論に対する批判へとわれわれを導くのである．前にも述べたが，彼にとっては，本来の精神的

要素は感覚ではなくて意欲（動能）なのである．彼によれば「享受において与えられ，それ故に心理学に相応しい形において与えられた主観は，意欲ないし注意という主観の一連の持続的活動に他ならない」のであり，心理学は「我々が感じたり知覚したり意志したりするようなときに，その一連の活動が感じたり享受されたりする様々な様態を記述することであろう」ということになる．

しかし，エリオットからみれば，「精神状態からその表示を抽象するならば，何 what が残るか」解らないのであり，「孤立した表示を経験しているときには，如何なる what 表示が残っているのか」解らないのである．

アリグザーンダは「ある人が捕えようとしているボールの動きに見入っているとき，接近してくるボールを対象として，それを知覚しようとするときの意欲は，視覚の意欲と予想的な触覚の意欲とのあの複合体なのである．これらの意欲は両目の動きと特に両手の動きとにおいて現われるのである」と述べる．

しかし，エリオットにとっては「一旦，非一精神的ないし対象的諸要素が抽象されてしまえば，指で触れることの出来るものを全く見出すことが出来ない」のである．即ち，ボールという対象が無ければ，触覚の意欲も存在しないのである．精神物理学的素材なら目に見ることが出来る．しかしアリグザーンダは心理学と精神物理学とは異なると言う．瞬間的に意識されるものとしての意欲は理解出来もしよう．しかし，彼の意欲とは瞬間的に意識されるようなものではない．なにしろ，意欲はあらゆるところに現前しているからである．彼によれば，心理学における主観とは，意欲という主観の「一連の持続的な」活動なのである．*

*

Pp. 68-9.

4－3－5　意欲が存在するのは，自我一意欲一実在世界というコンテクストにおいてのみである・このコンテクストにはある種の実在性が想定されているが，それは原初的実在性ではない•意欲には断片的実在性はあるが，全体的実在性はない

精神能力や行為能力の心理学を認めぬ限り，心理学的視点から観てさえも，意欲を究極的なものと見做さねばならぬ理由は存在しない．しかもエリオットは意志を思考よりも原初的なものとしては認めないのである．ところがアリグザーンダにとっては，「判断という行為は文字通り意志の行為として考えられ」ているのである．

なる程，判断の認識対象たる命題は意志された対象である．なる程，意志を知的言葉で語ったり，意志は観念の自己実現化であると言うことも，同じく可能かもしれない．意欲が現前存在することを認めるのにエリオットは吝かではない．しかし，あるコンテクストにおいてのみなのである．

意欲が現前存在するのは次のようなコンテクストにおいてのみである．即ち，一方において意欲が結びつく自我があり（但しこの自我はその意欲とは如何なるときにも同定されることはない），他方においてはその意欲が意図する実在的世界があるといった場合に限る（実在的といってもその自我の視点から観て実在的なのであり，従ってこの実在的世界が求められる全実在であるといった場合の実在的なのである）のである．何故その世界が実在的なのかと言えば，意志すること（メッサーAugust Messerの場合は欲求すること）においては，ある実在が既に措定されているからであり，欲求においては，欲求される対象は何故か実在として認識されている（ブラドリ）からである．

従って，アリグザーンダのように次の如く考えることは全体的に正しいとは限らないのである．「意志することにおいて，対象は実在として知られるようになる」と彼は考えるのである．しかも，こうした関係においては，意欲は孤立した意欲ではなくなるのである．*

*

Pp. 69-70.

4－3－6　意欲の実在性は生理学的過程にある・すると，心理学の課題は生理

学的過程たる情動を研究することとなる・意欲を情動と取ることは，志向される実在から意欲を分離出来るくらいに意欲を孤立させたことを示している・つまり，意欲は完全に主観的で感覚的になる・ところがアリグザーンダは，精神を外的諸物と並んで存在する物であるとすることもあったのであり，ここには矛盾がある・知られる情動は知られる感覚と同様に対象的であるが，感覚ほど対象的ではない・このことは対象性に度合いがあることを示す・アリグザーンダは対象性の度合いを無視し，截然たる境界線を引き，この境界線を踏み超える

アリグザーンダの意欲の実在性は生理学的過程の中にあるようにエリオットには思える．こうした見解にアリグザーンダ自身は不満ではあろうが，彼自身が「意欲におけるこれらの相違は実は空間的性格の違いであり，実は生理学的過程の所在する場と方向の違いなのである．そして所在の場と方向は現実に享受されている．」と述べているのである．

もし，われわれが「享受する」ものが生理学的過程であるならば，この過程が享受の対象であるか，その過程が享受であるかの何れかである．しかし享受とはわれわれが意識する存在者を表示しているのであるから前者は不可能である．後者の場合は過程自体を研究する以外に何も残らないのである．

もしわれわれが情動 affection を「意欲の一様相」として取り扱うことを意味するならば，生理学への傾斜は猶一層自然のものとなる．情動を意欲の一様相として考える必然性は，志向される実在（対象）から意欲を分離する程に意欲を「実体的な物」としてしまったときにのみ，生じるのである．すると，対象という別の「物」に作用し，以前とは違ったその物の印象を生じさせる第三性質としての意欲の特性は，その表示性を失い感覚的 aesthetic で完全に主観的となるのである．

もし対象性が絶対的であろうとして，全く度合いの問題ではないのならば，情動は感覚と同様に対象的であると論じる用意があるとエリオットは述べる．しかし，怒り（情動）は苦痛の感覚よりも幾分対象的ではないのは一体何故なのであろうか，そして感覚を観想し得る程には情動をわれわれは観想出来ないのではな

かろうか，とエリオットは問うのである．それらに対する答えが，情動は感覚に比べ本質的に知覚されにくいと言われるのならば，それは常に度合いの問題のように思えるとエリオットは述べる．エリオットによれば，スタウトと同様にアリグザーンダはあらゆるところで度合の違いを認識するのではなく，截然たる境界線を設け，あらゆるところでこの境界線を踏み越えているのである．彼は，われわれは対象を観想するがわれわれの状態の方は享受すると，両者を区別しながら，その一方で精神とは外側の諸物と共にある一つの物に過ぎないと言った具合に両者を同類と見るのである．その上で更に，精神と諸物との根本的違いは，精神は享受されるが諸物は観想されると言ったりするのである．*

*

P．70．

4－4　リップスの場合

4－4－1　リップスによる心理学の境界設定：感覚とは対象と自我とを同時に決定するもの・外的注意点と関係する諸性質が実践や自然科学の実在を，自我と関係する諸性質が心理学上の主観－質料を与える・諸性質自体は対象ではなく注意点とされない・規範科学は超越的自我を表出し，超越的自我への当為活動を心理学は因果律に基づきつつ経験的実在へと転換する

エリオットによれば，リップスの『内容と対象 Inhalt　und　Gegenstand』に表明されている心理学の境界設定は次のようである．

我々には感覚のみならず物も亦与えられている．物を見ている人物は感覚，表象，知覚，経験を見ているのではない．感覚とは私自身を決定することであり，感じることはその青やその赤を決定することである．従って，①　私自身，②　私が感じること，③　感じられているもの（感覚内容）の三者が相対的に区分され

ている．対象とは我々の対象であるから，我々が意識しているものが対象（我々の知識によって条件づけられる対象）である．何かを考えるということは，何かを対象にすることである．対象とは単なる現象ではなく，実在的な物である．即ち，対象自体は我々から独立している．感覚とは対象と私（自我）とを同時に決定するものである．即ち，感覚は対象と自我との間にあって，我々がそれらのどちらに注意を向けるにせよ，そのどちらをも条件付ける関係である．以上がエリオットの考えるリップスの心理学的境界設定である．自我と対象とは形而上学的に一つの全体を形成している．この全体から我々はどちらの方向であれ，抽象化を行ない得るのである．外的注意点と関係する諸性質が我々に実践や自然科学の実在を与え，自我と関係する諸性質が心理学上の主観－質料を与えるのである．心的状態は独立して存在しないのである．即ち，われわれへの表示において，外的や対象的を構成し，別の表示において，心理的を構成する，諸関係があるだけなのである．諸性質自体は対象ではないのであり，注意点とされることは出来ない．それらは注意点との関係において経験されるだけである．論理学，倫理学，美学といった規範科学は叙情詩的であるが，その一方で，心理学は叙事詩的であり，表出ではなく報告を与えるのである．規範科学は超越的自我を表出している．尤もある意味合いでは，この超越的自我は限界のある自我の現実化でもある．超越的自我は我々の中にあるが，我々はそれと同一ではない．同一でない限り，我々は超越的自我と同一であるべきである．この当為は召命であり，召命とは我々の中の超越的自我の存在と我々自身の限界との両者を表出しているのである．なる程，経験心理学は，経験が魂に「所属する」ということを知らしめる意識の中の諸活動（当為としての活動）を他の意識活動で以て置き換えたりはしないのである．だがしかし，経験心理学はそうした諸活動（当為としての活動）に対して，直接経験では目立ちえなかった別の性質をした様々な決定を付加するのである．即ち，刺激，連想，記憶の痕跡，知的能力，性格特徴，気質といったものである．このようにして，経験心理学は，因果律に基づきながら，精神的ないし心理的に実在的なものの世界を創造するのである．この世界は（超越的）自我の直接経験の中に与えられたものを完全に超越し，そうした理由からこれとの比較を完全に

超えてしまうのである．*

*

Pp. 71-2.

4－4－2　リップスは感覚を関係としながら，感覚の恒常的状態「何」を決定する•即ち，「自我－感覚－感じられるもの」という内的関係の中で，感覚は自我と対象との間の関係として其処に存在することだけを「私」は意味しているのであるが，リップスは感覚を「何」として，自我を「何」として決定する・感覚は自我やその感覚を「何」として性質化するのではなく，それら両者を完成して行く関係である•「あなた」は感覚を対象から分離して自我だけを決定するものとすることは出来ない

以上がリップスの経験心理学に関するエリオットの説明の要約である．エリオットはリップスの以上のような心理学に関する枠組みには殆ど間然する所がないと言う．そしてこうした理論からは，心理学的主観一質料は，存在者のある特殊な種類に限定されることがなく，様々な種類の存在者から成る筈であると述べる．しかしエリオットは彼の理論は，このことに反し，主観一質料を特殊な種類の存在者へと限定する傾向が強いということの解明へと移って行くのである．

エリオットは，感じること（Empfinden, sensing）はそれを逆方向に向け，物に対するのと同じ方法で私（自我 the Ich）に対して適用し得るのか？と問う．こうした考えには混乱があるのであって，「自我一感じること一感じられるもの」という三重の区分と，「感じること」は自我と対象との決定であるという素晴らしい考え方と，に基づきながら，何故さらに感覚の恒常的状態を決定する必要があるのかと彼は問うのである．ある色を経験するとき，その感覚は，私自身を何として「性質化 qualification」しているのでもなければ，その青や赤を何として「性質化」しているのでもない，とエリオットは考えるのである．たといどの様に「私」が「私自身」を表出したところで，その感覚は，私自身と対象との間の関係とし

て，即ち，内的なそして自我と対象との両者を完成して行く関係として，そこに存在することだけを「私」は意味しているのである．従って，もし「あなた」がこの感覚を対象からもっと分離して自我だけを決定するものにしようと計画するならば，「あなた」は感覚を完全に誤った状況に置くことになるのである．リップスは既に「対象は現実に我々に与えられている．［私（自我）］も既に我々に与えられている．諸感覚は我々と対象との間にある孤立した諸対象ではない．」と述べたにも拘らず，以上の如き矛盾を犯しているのである．*

*

Pp. 72-3.

4－4－3　現象が自我と対象とを構成して行くものとして「知られている世界」の，「もの」とは区別された思考的諸関係において，自然科学はその現象を処理する・科学の最終目標は諸項から構成される体系（関数）を構築することにあり，諸項は体系の中に過不足なく納まることにより定義される・しかし，項はその体系のみから性質を補給されるのではない・われわれは体系の外側から説明をすることが可能な諸項を体系に使用する・現象の究極的関係とは一つの科学のみによって決定され得ない・現象が自我と対象とを決定するのであるから，コンテクストに応じてある科学領域は対象的になったり主観的になったりする・心理学の主観一質料が自我との関係における現象であるならば，その自我の種類に応じて様々な主観一質料が考えられる・自我の種類の数だけ諸科学があり，諸科学の数だけ主観一質料がある

さて，自然科学の目的は，自我と実在の対象とを決定するものとして「知られている」様々な現象を処理することにあるとエリオットは考えるのである．つまり，そうした現象が「主観」と「関係」を持っていることが「知られている」限りにおいて，現象は自我と実在の対象を決定するものとして知られているのであ

る．ところが，そうした関係とは，現象が「もの」との関係においてのみ所有しているものとして既に「想定されていた」ものなのである．従って，このようにも言える．そうした現象が諸関係を所有していることが「知られている」限りにおいて，又，そうした現象が思考において「もの」なるものから区別され得ることが「知られている」限りにおいて，現象は自我と実在の対象を決定するものとして知られているのである．現象が自我と対象を決定するものとして「知られている世界」の「もの」とは区別された思考的諸関係においてその現象を処理することが自然科学の目的であるというのがエリオットの見解なのである．

従って，科学の最終目標とは，関係づけられた諸項からなる体系(関数)，即ち，それぞれの本質が体系の中にあるということによってのみ構成されるような諸項からなる体系を築き上げることなのであろう．そうした諸項はそれらが体系の中にあるということによってのみ完全に定義づけられるのであろう．そして，それらの諸項はその体系から分離され得るような如何なる性質も所有しないであろう．

しかし，どの経験主義的科目も，(諸項が)説明することを目的とさせられている体系（関数）の外側にそれらの説明があるような諸項を，使用しているのである．即ち，それらを分析するのに新鮮な視点をわれわれが要求するような諸項を使用しているのである．

科学の趨勢は現象の為のより多くの中間地帯の構成を内的に意味している．即ち，経験の主観的側面へと表示させられているより広大な実在領域のことである．経済学は生物学者にとっての，生物学は化学者にとっての，現象である．同様に，社会心理学は個人心理学にとっての現象なのである．個人心理学の単一の諸項とは何かとわれわれが尋ねるときに，エリオットは途方にくれるのである．

諸現象（自我と対象の両者を決定する諸現象）が究極的な外的実在に対して持っている関係とは，ある一つの科学が決定すべき知識的領域の中では論じられない．何故なら叙説の諸分野はコンテクストの違いに応じて対象的であったり主観的であったりするからである．諸事物は様々に非―精神的であるのと同じく，様々に精神的でありうる．従って，心理学の主観―質料が自我との関係における現象であろうとするのならば，その自我の種類に応じて様々な主観―質料が想定され

るのであり，一つの科学が想定する主観一質料で事が足りる訳ではない．社会文明構造において，自我の科学的作業において，思考法則において，イミジにおいて，感覚において，表出されていると知られる諸自我に応じて諸科学の全宇宙が存在するのであり，その数だけの主観一質料が考えられるのである．*

*

Pp. 72-4.

4－4－4　リップスは，諸科学にあっては，それら自身の心理的局面の抽出と，それと同時に自然の局面の抽出を行なうと考える・これは心理学において行なわれるべきことと彼が考えていたことと同じことである・心理学と他の諸科学が同じような課題を担うならば，その中で特に心理学が引き受けねばならぬ課題が必要になるというところから，彼は意識の様態，即ち，表示から分離された意味を心理学の領域とした・つまり，表象と表示とが分離されたのである

さてリップスであるが，彼は心理学以外の諸科学においてもわれわれは心理的局面を特に抽出するという暗黙の想定を行なうのだが，その想定によって，リップスは精神的と自然的との彼自身の素晴らしい区分に矛盾する結論へと，それとは気付かぬうちに，追い込まれてしまっていると，エリオットは考えるのである．

心理的局面は常に現前していると彼は考えていたのである．即ち，知覚の場合のみならず知のあらゆる場合において，自我なるものの存在するところには何処にでも自我とその対象との連続が存在していると彼は考えていたのである．従って，科学においてはわれわれは精神的実在の一つないし幾つかの領域を特に抽出し，そしてそれと同時に自然な実在を抽出するのである．つまり，われわれはあらゆる科学において，リップスが特に心理学の場合にわれわれが行なうようにと薦めることを行なったことになるのである．即ち，実在のある領域を自我の状態と表現として考えたことになるのである．

こうした考えが正しいとするならば，リップスが数ある諸科学の諸領域の中で，特に心理学の領域として考えていたものは何であろうか．それは孤立した「意識の様態」，即ち，表示から分離させられた意味，のことであろう．「あなた」は先ず本質的にある世界に関係した精神を持つのである．その精神を研究するために，「あなた」はその精神をその世界から抽出するのである．しかし，その精神と共にその世界も抽出するのである．実在世界を手に入れる為に世界を二重にするのである．それから「あなた」は最初の世界は表象として孤立して存在すると主張し，表示は「あなたの」世界を表示し主観の世界を表示するのではないと主張するのである．これらは総て，局面の相違を物の相違として取り扱うという間違った考え方から，生じてくるのである．*

*

P．74．

4－5　ウォウドゥハウス女史の場合

4－5－1　女史の心理学的主観一質料は対象的である・彼女にとっては，外的世界と精神的世界とが同じ質料から成るのだが，経験されるものとしては共に断片に過ぎない・彼女にとっては，意識内容は外的世界と主観の歴史とに連続するが，主観の歴史に連続した意識内容が心理学の主観一質料である・彼女にとっては，外的世界に連続した意識内容と主観の歴史に連続した意識内容との二種の対象があるようである・しかし，これら二者は二種類の対象ではなく，互いに連関した統一体である・法則はその実在とその観念とが一体である限りその観念とその実在に有効である・自然世界の観念が実在から分離している限り観念は未分化の感情となり生理学的状態へと変質してしまう・主観の歴史に連続した意識内容とはこうした生理学的状態である

女史の場合には，定義に精神的と非一精神的との区別が全くない．従って，女史の言う内容とは対象と同程度に対象的である．「心理学は対象の諸内容を拡大するのではなく，対象の諸内容を限定するのである，[何故なら心理学は対象内容の外形式に関心を持つから]」と言うのである．これは重要ではあるが非常に特異な「心理学的主観－質料の定義」である．外的世界と精神的世界とが全く同じ質料から成るのであり，両者は究極的には同一であるが経験されるものとしては共に断片に過ぎないというのである．

女史によれば，心理学者によって調べられる世界は，主観を条件付け，主観を構成している様々な諸要素と関係した意識内容という世界なのである．エリオットによればこれらの諸要素とは，外的世界の「以前はその意識の内容であった」部分であるか，乃至は，生理学的かつ心理一自然的状況であるかの，何れかであろうということになる．一方において内容は外的全世界に連続し，他方において内容はその主観の歴史と連続しているのである．後者の関係だけにおいて，内容は心理学的主観一質料なのである．従って，心理学は［心理的］ではなくて個人的 personal を取り扱うのである．

こうした区分は対象の二つの明確な種類を与えるようにも見えるであろう．しかし，内容の連関は一方においては実在世界の連関へと還元され，しかもそれと同時に他方においては生理学的連関へと還元されもしよう．つまり，二種類の対象があるのではないのであり，双方は一体をなしているのである．記憶の内容は想起される実在に忠実に，且つ，「想起される実在と同じ方法で」連関すると見做されねばならないのであった．即ち，想起される実在に有効な諸法則は，それらの表示における記憶の連関にも有効なのである．又，自然世界の諸法則は，自然世界の諸観念が実在の諸観念である限りにおいて，それら自然世界の諸観念にも有効なのである．従って，自然世界の諸観念が実在的ではない限り，諸観念は明確化から孤立した傾向性に至り，更に傾向性から孤立した未分化の感情に至るのであって，観念は生理学的状態へと溶解（変質）してしまうのである．観念が実在的である限り，観念は観念ではないのであり，観念が実在的でない限り，観念は観念ではないのである．*

*

Pp. 74-5.

4－5－2　想像的内容の諸連関はコンテクストによっては個人的であるとも取れようが，その一方で美学的な展開と共に対象を表出する・想像的作品は純粋に個人的ではない・想像的作品を個人的なものと取るならば，作品は病的な生理活動による産物となる・文芸批評は心理学ではない：批評は作品の諸観念が志向する作品独自の実在世界への表示を内包するが，心理学はこの表示を内包しない

こうしたことは想像の諸観念や回想の諸観念にも当て嵌まるのである．偉大な詩人の諸観念は如何なる意味合いにおいても恣意的であるということはない．想像が気紛れであるという意味合いでは，精神異常者や痴愚者の諸観念の方が詩人の諸観念よりもはるかに「想像的」である．真に偉大な想像作品においては，その連関は如何なるところにおいて見出だされる如何なる諸連関にも劣らない論理的必然性によって束ねられていると感じられるのである．自明なる非一連関性とは言葉がその正常な意味 meaning を超えて使用されたり，その正常な意味とは異なった意味で使用されたりするという事実によるのである．言葉の重要性を完全に見抜けない人々にとっては，美学的な展開と表出される諸対象との間の関係が目に見えない not visible のである．

内容の諸連関は主観的であり心理学に特異な主観一質料である，ということは決してない．内容の諸連関は，「あなた」が望むならば，個人的 personal である．しかし，想像的作品は純粋に個人的であることは如何なるときにもない．われわれが想像的作品を純粋に個人的であると見做す限り，即ち，作者個人にとってのみ重要であると見做す限り，われわれは想像的作品を想像の産物としてではなく病的状態の産物として説明しているのである．こうした理由から，われわれはマラルメの詩を，われわれが夢を説明するように，即ち，病的な生理学的活動によ

るものであるかのように，説明したくなるのである．

従って，**想像作品は純粋に個人的だから，批評は総て必要ない言われるならば，**作品が生産される諸状況を含めて批評とは心理学ではないということをわれわれは指摘出来よう．即ち，批評は作品が準えられる実在世界への表示をあらゆる点で内包しているのである．これは心理学においては認められない方法と言えるのである．*

*

Pp. 75-6.

4—6　「心理学的出来事」をそのコンテクストから引き離し，そのコンテクストは別の純粋に心理学的な出来事というコンテクストに納めるわけにはいかない•観念を対象として把握するなら，観念は対象的実在と成るか，それとは逆の方向に生理学的基盤へと至る•観念に，純粋に「心理学的」現実存在を持つよう要求出来ないのであり，これを要求するブラドリに反論せざるを得ない

「心理学的出来事」をそのコンテクストから引き離した上で，しかもそのコンテクストとは別の純粋に心理学的な出来事というコンテクストに納めるわけには行かないということは，以上で充分明かになったことであろう．それとは逆に，認識論的視点からみて，ある観念が実在世界にたいして持っている関係の問題点（感じられる全体から自然の世界を切り離し，自然の世界として分類しても，自然なものは心が組み立てたものに過ぎない）は次章で取り上げることになる．

「あなた」が観念を対象として把握しようとするならば，観念は自らを対象的実在へと同定するか，それとは逆の方向へと溶解し，対象的実在とは別の実在である，生理学的基盤という実在へと至るか，の何れかとなるのであった．一方で神経組織に関係し，且つ，他方で志向される実在に関係している観念は，認識論においてある種の現実存在を持ちもしようが，**純粋に「心理学的」現実存在を持**

つことを要求することはないのである．

この点において，エリオットはブラドリが心理学的主観に関して述べざるを得なかった多くの事柄に対して反論するのである．彼の反論はブラドリの特に「能動注意」，「意志の定義」，「心理学における現象主義の弁護」へと向けられるのである．最初の二つの論文は説明を志向したものである．それらは直接的与件を普遍的連関によって説明するのである．従ってわれわれはこれらの与件が「何」であるのかを調べることになろう．最後の論文はエリオットがこれまで攻撃してきたものとよく似た見解を弁護したものである．

4－6－1　ブラドリにとって，心理的出来事とは，直接経験から分離しているにも拘らず，直接に経験されている・魂に生起していると「解釈される」出来事は，魂から観たのと同じ出来事ではない・後者は外的実在を質化して行く・質化されたものを前提に前者はある局面の選出と法則を必要とする・前者は「何」であり，後者は「それ」としか言い様がない

ブラドリによれば，「心理学とは心理的出来事に関する学問であるべきであり，こうした出来事は一つの全体としてか，あるいは，一つの全体の不可欠の部分として，直接に経験された何らかものであり，当面の目的にとっては，特殊な魂に起きている乃至は特殊な魂を性質化している一つの属性として以外には解釈されない出来事である．これらの出来事が何故出来事であるのかと言えば，これらの出来事は時間の中で生じ，[実在世界]一般の秩序の中に一つの場を持っているからである．……一つの魂あるいは主観の意味とは……恣意的に固定されねばならない」，「あなたは出来事の生起の法則によってのみ……出来事を説明出来るのである．そして，これらの法則が働く限り，これらの法則が究極的な真理を持っているのか，ある程度虚構で偽りのものなのかは，あなたの目的にとっては重要ではないのである」ということである．

心理的出来事は（[直接] 経験とは別のものにも拘らず）直接に経験されていると言うのである．当然ながらここで，われわれの意識的生において，経験そのも

の以外に，何らかのものが直接に経験されるのかどうかという問題が，生じるのである．更に，その特殊な魂に起きていると解釈される出来事は，その魂から観たのと同じ出来事ではないのである．何故ならば，その魂の視点から観れば，出来事はその魂を「質化」するのではなく，外的実在を質化するからである．更に，その魂とは別のある視点から観たとするならば，出来事とは何であろうか．「あなた」が「出来事が生起する法則」を手にするまでは，「あなた」は出来事を経験していると言われる筈がないのである．出来事とは「何」であろう．つまり，何らかの形で解釈された「それ」であろう．何故なら「あなた」はある一つの局面を選び出さねばならないからである．つまり，それに関して法則が存在し得る何らかのものが存在する以前に，「あなた」は出来事に内在するある視点を占有せねばならないからである．

4—6—2　ブラドリの心理学における「知識が志向する実在」としての認識と「魂の中の出来事」としての認識との混同・前者においては存在と思考とは形而上学的に一致する・後者においては真理自体は有限の魂から完全に独立する・認識においては認識という出来事は意識されない・認識が心理学的出来事である限り，その認識は真理や判断ではない

エリオットによれば，ブラドリの立場には「知識が志向する実在」としての知識と「魂の中の出来事」としての知識との並行論が存在するのである．ブラドリは「観念や判断はある時間に生起するのではない，この意味合いで観念や判断は出来事にはならないと述べることは，明かに事実に反するように思える……．」，「観念や判断……は間違いなく心理的出来事である……．真理は魂の中で生起するのでないならば，従って，時間の中で現象する出来事ではないならば，真理は真理では全くないとわれわれは言えよう．」と述べるのである．このような見解には心理学的視点と形而上学的視点との混同があるように思えるとエリオットは述べるのである．形而上学的視点から観れば，即ち，「思考」は「思考されたもの」の「もと」にあるという視点から観れば*こうした見解は正しい．つまり知識は実

在の下にあり，魂は存在の下にあるのである．しかし，心理学的視点から観れば，即ち，観念は精神の中の出来事であるという視点からは，こうした見解は明かに間違いなのである．何故なら，真理としての真理は，その that 真理を知覚するときに経験される魂から独立して「現象」せねばならないのである．そして，真理が（真理として）魂と一体であるというのは，形而上学的一致の問題であって，魂の「中で」存在と思惟との一致が生起しているということに関係していないからである．真理自体は有限の魂から完全に独立しているのであって，真理自体とは異なる有限の真理が有限の魂を生じさせると，われわれは言えよう．従って，知識が心理的出来事である限り，知識は真理や判断では決してないのである．また，われわれが知識を心理的出来事として意識する限り，知識はわれわれが意識している心理的出来事としての「真理」と必ずしも同一ではないのである．知識においては，知識という出来事は意識されるようなものではないのである．**

*

アリストテレースにおいては，「知覚」は感性的事物を受け取る能力である．それに対し「ヌース（理性）」は事物の「純粋な形相」を捉える．「知覚」と「思考」との最大の差異は，「知覚」にあってはその対象がその外側にあるが，「思考」にあっては「思考」は「思考されたもの」の「下」にある．

**

Pp. 77-8.

4—6—3　主観の視点からは，生起の法則は「主観の意識している世界」の法則であり，その生起は出来事ではない・傍観者の視点からは，生起の法則は主観の意識を超えたところにあり，生起は出来事である・主観は先行した諸観念や諸判断を人生における出来事として把握している・このことは，われわれが観念が表示する実在としての判断から，われわれ自身の質化としての判断へと絶えず移行していることを示す・回想においても，われわれは知覚の対象を回復するのではなく，対象のイミジをこ

しらえるのであった・しかし，観念が表示する実在としての判断とわれわれ自身の質化としての判断とは，回想における同一と同様に同一である・記憶とは心理－自然的視点からは諸法則に従う同一にして人工的なものである・判断を想起するとき，われわれは一つの対象的を主張する，即ち，判断を一つの出来事として表示する・しかしこの表示は，観念が実在を表示するとき（判断のとき）の表示ではなく，回想のときの表示である・判断や観念は回想においては出来事であるが，それら自体においては出来事ではない

観念や判断が一つの出来事であるのは，主観の視点から観てではない．主観の視点から観るならば，生起の唯一の諸法則は主観が意識している世界の諸法則である．他方，傍観者の視点から観れば，唯一の諸法則は主観の意識を越えた所にある諸法則である．

だがしかし，主観は先行した諸観念や諸判断を彼自身の人生の中の出来事として意識していると言われるであろう．つまり，万一主観が先行した観念や判断を「把握された」諸実在としてのみ意識しているとするならば，主観は主観の過去を全く意識していないであろう，何故なら主観の過去は「主観の」過去ではなくなるのであり世界の過去となるであろうからだと，言われるかも知れない．この見解は，つまり，われわれが実在としての判断からわれわれ自身の質化としての判断へと絶えず移行しているということから出て来るのである．われわれ自身の質化への移行とは，記憶に関するエリオット自身の説明がどうしても支持せざるを得ない説である．

しかし，エリオットは再び，そこで述べた「同一性の理論」を提示し，記憶とは洗練された人工的な産物であるという事実を強調するのである．つまり，記憶とは心理－自然的視点からは，諸法則に従うものとして取り扱い得る（そのとき記憶は記憶ではないのであるが）という意味合いで同一的で人工的なのである．要するに，記憶は実践的な必要に役立つのであり，それ自体として現実的であった何らかのものを，与えるようなことはないという意味合いで人工的なのである．

外的実在の記憶において，われわれはある実在を表示する一つのイミジを抱くように，われわれ自身の判断を想起することにおいて，われわれは一つの対象的(われわれが斯く斯くと判断した「それ *that*」のこと）を主張するのである．つまり，この主張は，判断を一つの出来事として表示するのである．しかし，この主張は主張するという活動の中で判断を出来事として構成しているのであって，その判断自体がなされた時点では判断は出来事として知られるようなものではないのである．何故，判断の想起において判断を一つの出来事として表示するのかと言えば，表示とは，エリオットが幾度も示唆したように，表示自体の外側では表示が表示するものの現実存在を，必ずしも内包しないからである．*

*

P．78．

4－6－4　想起や他者の行為の観察はある人工的な出来事を表示する・人工的ではない主観の質料は決定出来ない・何故なら主観の視点から観た内的諸関係とは，対象的関係とは異なり法則化され得ないからである・魂は各現象がその魂に対して持っている意味に応じて変動するからである・魂とは，あらゆる瞬間における，魂の経験という全体世界である・同時に魂と出来事とはその瞬間を超越している・魂の全過去は現在に入り込んでいる・主観はブラドリのように性格として解釈しうる心理的事実ではない・性格とは有機的全体を内包する行為やふるまいに関する社会的解釈であり，ある方法で性質化された実在世界である・心理的性格と自然的性質の違いはない・性格は現実的なものを根拠とし，このものは自然な構造を備えている・精神的は主観的と異なる

「記憶」においてと「他者の行動の観察」においては，それら自体としては如何なるときも現実的ではない様々な「出来事」への表示をわれわれは行なっているのである．こうした場合，われわれは主観一質料を決定するに足るだけの無矛

盾的な視点を所有していないのであろうか．所有していないという二つの見解がある．

第一に，心理的現象としてのこれらの出来事には法則が全くないのである．何故なら，様々な出来事自体の間の諸関係は主観の視点から観た実在世界によってのみ内的に決定されるのであり，又それらの諸関係は傍観者の視点から観た実在世界によってのみ外的に決定されるからである．主観の視点から観た内的諸関係とは対象的関係とは異なり法則化され得ないのである．傍観者の視点は当事者の内的心理現象とは関係がないのである．内的視点と外的視点との双方から得られた中間の実在は，科学が把握し得るようなものよりも大きくもあれば小さくもあるのである．

第二に，魂は，総ての現象が同一レベルで定着しうるような確定したものではないのであって，各現象が魂に対して所有している意味に応じて，変動するということである．特殊な出来事が「何」であるのかを知る為には，その出来事が生起している魂を知らねばならない．つまり，魂はその魂に生起する出来事の中にのみ存在するのである．

従って，実は，魂とはあらゆる瞬間における魂の経験という全体世界なのである．と同時に，魂と出来事とはその瞬間を超越しているのである．**魂は，**魂の全**過去が現在**へと入り込む**限りにおいて，魂の全過去なのである．**そして，その全過去は現在に内包されている過去なのである．ブラドリも『現象と実在』の275頁において「しかし，如何なる一時においても……魂は心理的事実という現在の与件プラスその現実の過去とその仮定的な未来なのである」と述べている．

しかし，エリオットは『マインド』33号，29頁においてブラドリが述べている「魂とは……魂が獲得した性格である」という見解や，『現象と実在』の276頁における「魂はある種の性格を持っていると述べるときには，われわれは現在と過去の心理的諸事実を主観として解釈しているのであって，われわれは，この主観がそうなるかもしれないとわれわれが考える他の心理的事実を，この主観の述語とするのである」というブラドリの見解には，満足できないと述べている．

何故ならエリオットは，主観は［ある性格を帯びた主観としてわれわれが解釈

する「心理的」事実］たることが一度たりともあるのか，と疑っているからである．人は強欲であったり，寛大であったり，邪悪であったり，献身的であったりする．これらの性質が性格であろう．しかし，強欲や寛大は心理的出来事ではなく行為やふるまい（有機的全体を内包する行為やふるまい）に関する社会的解釈なのである．強欲な人や寛大な人の精神の中にあるものは強欲や寛大ではなく，ある方法で性質化された実在世界なのであり，これらの性質が主観的で性格によって条件付けられたものとして解釈されたり内観されたりするのである．しかし，「主観的」であるということは精神的であるということではない．そして，ある性格をしているということは，究極的には有機的全体のある性格に他ならない．従って，エリオットにとっては，心理的性格と自然的性質との間の差異は全く存在しないのである．何故なら，性格とは現実的なものを根拠とせねばならないのであり，このものは自然な構造をしているに違いないからである．*

*

Pp. 78-9.

4－6－5　情想は注意され得る・主観と対象との相互連関の対象的一側面が情想であり，主観的一側面が感情である

それでは，『マインド』33号41頁で述べられた，情想は注意され得るというブラドリの説は如何であろうか．エリオットはこの説は正しいと考える．純粋感情としての「嬉しさ」は抽象であって，それは実在的には常に部分的には対象的であるからである．つまり，情想は実在的に対象の部分であるからであり，究極的には対象と同程度に対象的であるからである．その為，対象ないし諸対象の複合体が想起されるときには，「嬉しさ」も同様に想起されるのであり，主観の側に基づいてではなく対象の側に基づいて自然に想起されるのである．しかし，「嬉しさ」は想起されるのではあるが，能動的「嬉しさ」としてそれ自身を想定する傾向があるのである．ここには対象的相互連関（オブジェクテイブ・コレラテイブ）の

理論的根拠がある．*

*

P．80．

4－6－6　ブラドリは意志を観念の自己実現として考えるにも拘らず，意志を定義可能な想定物として考える・観念とは「私の観念」であらざるを得ないのであり，そうである限り，観念は既に意志されている

ブラドリの注意の理論（『マインド』41号）と意志の理論（『マインド』44，46，49号）を調べることによって，エリオットのこれ迄の反論はより一層明確になるであろう．ブラドリは意志とは観念の自己－実現であると述べるが，こうした説明は形而上学的であり心理学的ではない．ある能力を，意識の外にある何物かを「表示するもの」として説明するやり方は，心理学的説明ではないような気がするとエリオットは述べている．実際には，ブラドリは活動中の意志にのみ関心を抱いている．即ち「その充全なる意味合いにおいて解釈された意志には心理学は関与できない，という見解に私は同意する」と彼は述べるのであるが，充全なる意味合いにおいて解釈された意志とは「持続的な傾向性」（44号）であるのだ．しかし，この定義はエリオットが考えている意志とは何の関係もないのである．

「私は観念をそれ自身変化をするものとして知っているのであるから……この変化は又私自身の活動であると私は知っている」とブラドリは観念を想定しているが，しかし，観念は私の観念であらざるを得ないのであり，想定されたものや知られたものではないということをエリオットは知っているのである．「もし，観念がある別人の活動として，私の精神の中で性質化されたままに留まるならば，観念はその厳密な特性においては，又それ自体では，私の存在様式 person の中でそれ自体を実現できないのである」と彼が述べている通りである．観念は私の観念であらざるを得ないという事実が総てを語っているように思える．何故なら，観念が「私」の観念である限り，観念は既に意志されているからである．*

*

P. 80.

4－6－7　意志とは？：観念が意味と現実存在との中間にあるように，意志は主観と対象の中間にある・感情移入の結果として意志が見出だされる・意志とは自分自身と対象との間の感じられる連続性である・意志とは主観と対象の両者に別個に含まれる同種の物ではない・意志は主観と対象との中間の場に所属する定義不能のものであり，解決せねばならぬ問題を提起しない・意志は最終的には純粋な現象である・われわれが心理学を持つつもりならば，われわれは何らかの意志の能力を想定せねばならない・こうした心理学は科学ではなく哲学となる・何故なら，科学は対象と対象の関係を取り扱うが，意志は主観と対象の間にあるからである

意志が感じらていない限りでは，意志という概念を使用せねばならぬ理由は全く理解出来ない．意志が感じられている限りでは，意志は何の説明も必要としないし，如何なる説明も見出だせない．ブラドリの説明は，われわれが意志が存在するかもしれないと思うときに「何」が生じるのかということに関する真の説明であるかもしれない．しかし，真の説明である為には，説明はその視点を正当化せざるを得ないのである．

観念は対象ではなくて，現実存在と意味との間の中間段階を占めている．純粋に外的視点から観れば，如何なる意志も存在しない．何らかの現象の中に意志を見出だすということは，ある種の感情移入を要求する．われわれは人の行為を観察し，われわれ自身を彼の立場に完全にではなく部分的に置くのである．又は，われわれが活動し，われわれ自身を傍観者の立場に部分的に置くのである．従って，こうした局面の二重性が実は意志という言葉の使用を正当化するものなのである．

別人の存在様態も，またある度合いを持った他の物 thing も，われわれにとって

は孤立した対象ではない．対象と自分自身との間には感じられる連続性が常にあるのだ．この共通性は，主観自体と対象自体との両者に所属し且つ両者の各各に独立して所属する同じ特性を共有することにあると，取ることの中に，唯一の誤謬は存在するのである．そのように取るならば，この特性は物として取り扱われていることになるのである．

しかし，意志は完全には意識の特性ではない．そして意志は物その物の特性でも決してない．意志は葛藤においてのみ生じるのである．従って，意志は原始的精神においては，主観の特性としてと同じくらい自然に対象の特性として認められるのである．従って，ある程度の抽象化によってのみ，われわれはわれわれ自身を意志として，又，対象を「気力」によって動かされるものとして考えるようになるのである．「気力」とは，われわれが想定することに成功したある度合いの対象化のみを示す表現である．

以上のような理由から，エリオットは意志を定義不能のものとして，且つ，解決せねばならぬ問題を全く提起しないものとして，見做そうとするのである．もしわれわれが心理学を持つつもりならば，われわれは意志の能力を想定せねばならない．尤も，われわれは意志を最終的には純粋な現象として考えるのではあるが．従って，こうした心理学は科学的学問ではなく，哲学的学問となるであろう．何故なら，科学は対象ないし対象の関係を取り扱うのであって，意志は対象と主観との間の中間の場に所属するからである．*

*

Pp. 80-1.

4－6－8　注意も意志と同様に半－対象であり，二重の局面を持つ・心理学は二重局面を持つものを研究する・ブラドリは注意を二つの局面以外の明確な何物かに同定する・しかし注意の説明とは生理学的状態を記述し，そして把握された実在を記述する以外にない・しかしブラドリはそれらを一つの対象へと混同し，混同の理由として形而上学的，有機的全体説

を持ち出す・生理学的状態と把握された実在とが融合して感じられた状態のときにのみ，注意がある・この融合を有機的全体性によって理由付けるのは形而上学的な理由付けとなり，心理学的理由付けとはならない・これら二者が連関していると知覚される限りそれらは連関しているというのが心理学的説明である・生理学的状態の種類に応じて，それらに連関する幾つもの把握された実在があり，この連関の数だけ様々な心理学的研究が存在する・心理学は科学ではなく，諸研究の集成であり，集成結果は哲学が考慮せねばならない

次にエリオットは注意に関する考察にかかる．注意も意志と同様に半－対象のクラスに内属する．注意とは意志と同様に二重の局面を備えたものであり，例えば能力と能力の表現の何れとも見做し得る．意志を見出だすには観察と共感という感情移入が必要だったのと同じことである．心理学とはこうした二重の局面を備えたものを研究するのである．

しかし，ブラドリは注意を能力ないし能力の表現以外の何か別の物へと（それが何であるのかを知らずに）還元しようとするのである．注意を説明するには，生理学的状態を記述し且つ把握された実在を記述する以外にないのでる．生理学的状態と把握された実在とが識別出来ない程に融合したときにのみ，純粋な注意が存在するのである．このことは，こうした融合がいたるところに見出だされるということによって，例外は生じないのである．何故なら，感じられている状態のときにだけ，これら二者は融合しているのであって，われわれがこの感情を対象へと変じたときに二つの要素が分離するからである．

このことをブラドリのように，われわれは連関していない幾つもの対象に一時に注意できないので，われわれはそれらを単一の対象へと有機体化する，と理由付けもしよう．しかし，世界が世界である限り，世界は自らを分節を持った有機的全体へと組織化するという，実在とは有機体化されているという，理由付けは形而上学的であり，新奇なものに見えても，心理学的説明ではない．心理学的視点から観れば，知覚される諸物は，それらが連関していると知覚される限り，連

関しているのである．又，もしわれわれが幾つもの対象を熟視して，それらが連関していないと知るならば，それらは連関せずに存在しているのである．しかし形而上学にとってはそのようなことはないのである．以上のような心理学的な説明が注意の状態に関する完全な解明なのである．

では心理学といったようなものは存在するのであろうか．ジョセフ(H．W．B．Joseph，*Mind* XX．）の言葉を借りつつ，エリオットはこの問題に対して次の旨を答える．「心理学は科学ではない．心理学は多少とも分離した諸研究の集成であり，その集成結果に関しては哲学が考慮せねばならない．個としての魂ないし自我の本質が定まれば，それに応じて二重人格や親族問題が研究される．ある人の精神と他者の精神の働きの早さの比較ということになれば，それに応じて連想時間や反応時間の研究がある．しかしこうした研究は思考の本質を解明することはない．脳の治療という観点からは，脳内の位置測定という心理一自然（身体）的諸研究がある．認識する者は認識されるものと共に何故か同一の全体に属するという形で魂が想定されるならば，それに応じて精神的なものの知的なものへの関係に関する諸事実という研究がある．」と．心理学は生理学的状態の種類に応じて幾つも把握された実在が連関し，その連関の数の分だけ幾つもの心理学的研究が存在しうるとエリオットは考えるのである．*

*

Pp．81-2．

5　様々な心理的知識は，生理学的，生物学的，外的世界的，知識の何れかである・その知識は実在の認識された外的世界と実在の神経組織を内包している・精神的である精神内容は無い・対象であったり，対象から独立している意識は無い・科学は対象を，心理学は半一対象を，形而上学は主観(視点）を，取り扱う

なるほどジョセフの述べるように，心理学には，心理一自然（身体）的にとっ

て重要な分野もあれば，行動の研究もあるし，内省を価値無しとはしないような諸活動もある．しかし，そうした知識は生理学的，生物学的，外的世界的，な知識の何れかなのであり，実在の認識された外的世界と実在の神経組織とを内包しているのである．

何故なら，精神的である精神内容があるとわれわれは言うことが出来ないからである．こうした意味合いでは，精神的なものは何もないのである．又，意識が対象であろうとしたり，意識が所有している諸対象から独立した物であろうとするならば，意識といったような物は何も無いのである．

視点と対象と半－対象とがあるだけである．科学は対象だけを扱う．合理的，能力的心理学という意味合いの心理学は半－対象を扱う．形而上学のみが主観つまり視点を取り扱うのである．*

*

Pp. 82-3.

本論文は平成6年度学術研究会研究助成（個人研究）による。